自由南アフリカの声
Voice of Free South Africa

2004年2月
No.34

発行　／　アジア・アフリカと共に歩む会
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2004年２月の報告と予定

- ■ 10月　西ケープ州へ移動図書館車を送付
- ■ 10月　ELETとミーティング
- ■ 11月　JICAとの協働によるELETのエイズ学校教育始まる
- ■ 12月　南ア・デベトン移動図書館訪問
- ■ 1月　南ア連絡員一時帰国報告会
- ■ 1月　連絡員南アへ戻る
- ■ 1月　ELETへ本5048冊を送付
- ■ 2月　ELETとミーティング　ハウテン州移動図書館訪問

目次

クワズールーナタール州ンドゥエドウェにおける
HIV/AIDS ピア教育プロジェクト……2
報告会の感想 ……6
始まる TAAA と ELET と JICA の協力事業 ……7
南ア移動図書館活動報告 ……8
１２年間、南アに関わってきた理由 ……１０
会員制度及び資金支援について……１１
寄付・賛助会費をくださった方々 ……１２

ウェストコースト地区を巡回する図書館車が港に到着

クワズールーナタール州ンドウェドウェにおける HIV／AIDSピア教育プロジェクト

注)ピア教育とは、同レベルでの教育、つまり生徒の代表がリーダーとなり他の生徒達に教育するという意味

TAAA南ア在住プロジェクトマネージャー
平林　薫

南アでエイズが現実視されてきた

南アフリカは民主的な国家となり、経済力も回復してきており、国は順調に進んでいる。まだまだ貧富の差はあるが、生活環境、栄養がよくなってきており、お年よりは長生きできるようになってきた。しかし最近、週末に黒人居住区を訪問すると、あちこちでお葬式の列に出会い、その多くが犯罪、交通事故、またはエイズで亡くなった若い人たちのお葬式なのである。結果、子供達はおばあさんや親戚に引き取られたり、身寄りのない場合は孤児になったり、近所の人たちに食べさせてもらったりしている。これまでコミュニティーではエイズを現実視しようとしなかった。若い人が病気で亡くなると、誰かからウィチクラフト（魔術）をかけられたなどとまで言われた。政府内でも、大統領のスポークスマンだった人や、元ANC青年同盟のリーダーだった人などが若くしてなくなっているが、決してエイズで亡くなったとは報道されなかった。しかし、もう黙っているわけにはいかない状況になってきている。政府もやっと抗ウィルス薬の配布を予算に入れ、主に妊婦から赤ちゃんへの感染を防ぐ試みが始まったところである。

エイズに関する誤った情報も氾濫

このプロジェクトは、特に感染率の高いクワズールーナタール州の、ンドゥエドゥエという地域で行なわれる。ここは港町ダーバンから直線距離では60キロほどの、位置的には決して地方と呼ばれる地域ではないのだが、ダーバン郊外を過ぎ、白人大農場の外に出た途端、道は未舗装になり、奥に入るとまだ電気や水道も通っていない場所もある。これこそがアパルトヘイト政府が行なった統治の仕方なのである。現在クワズールーナタール州のHIV感染者数は181万人といわれているが、検査をしていない人もいるので、数はもっと多いのではないかといわれている。妊産婦検診を受ける女性の3人に一人が感染しているというデータもある。基本的にアフリカ社会全体にいえることだが、特にこの州のズール一人の間では、セックスに関して話題にすることはタブーである。

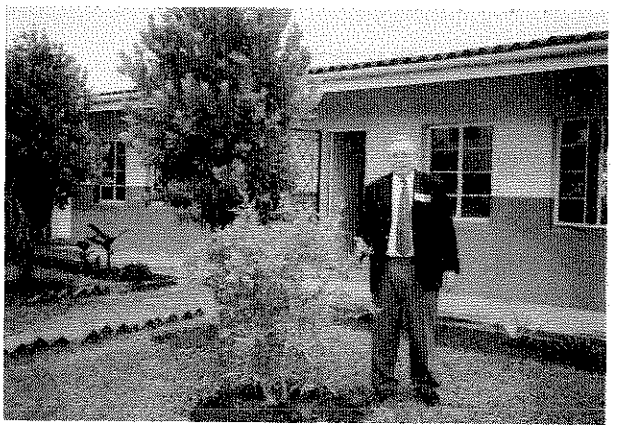
また男性優位の社会なので、女性が発言しづらく、例えばコンドームを使用して欲しいなどと言えない場合がある。また、病気になると今でも祈祷師にかかる人々が多く、HIV／AIDSも祈祷師が治療できるといった誤った情報を信じている人も多い。このような状況であるため、家庭内で子供たちが親に正しいアドバイスをもらうことは難しいといえる。また学校では先生方が口を閉ざす中、あらゆる噂が広がっている。一方メディアからの情報も氾濫し、そんな中で生徒達は混乱してしまっている。そこで、生徒の代表がリーダーとなり、正しい知識と情報を学び、それを教室で歌や劇を通してクラスメートに伝え、一緒に考え話し合うというのがこのプロジェクトである。

エイズ教育の研修が始まった

11月28日にプロジェクト参加校の校長先生を対象とした最初のワークショップが行なわれた。会場はリスィテムバ中学校で、ンドウェドウェの入り口に位置する。前日の大雨のため、途中ぬかるみの中をすべりながら会場へ向かった。奥の地域では道路が通行不可能になってしまい、参加できなかった校長先生もいた。またこの時期はちょうど年度末試験のまとめで学校は忙しく、結局１２校の参加となり、中には校長の代理として先生が参加した学校もあった。

お祈り・合唱・ゲームから・・

ワークショップはまずお祈りから始まる。事前に決めたわけでもないのに一人が祈りの言葉を述べ、その後ゴスペルの合唱へと続く。まず ELET 代表のマービン・オグル氏が開会のあいさつをし、次に学校巡回指導員のノントレとプロジェクトマネージャー平林があいさつをする。ワークショップの始まりとして、参加者がリラックスし、お互いを知る意味でアイスブレイカーが行なわれた。全員が広いスペースに集まり、二人ずつ組になる。最初にノントレが鬼になり、"手と手" "頭と頭" のように合図を出し、それに従ってペアが手と手を取り合ったり、頭と頭をくっつけたりする。メンバー交替の合図でグループがばらばらになり、急いで違う相手を探す。一人残ってしまった人が鬼になり、次に合図を出すという単純なゲームなのだが、椅子取りゲームのように結構スリルがあり、大きな女性が必死で突進してくる姿は結構おかしく、一気に和やかな雰囲気になった。次にワークショップにおける決まりごとを参加者が手を上げて述べていく。例えば、携帯を切る、全員が参加する、他人の意見をよく聞く、意見を交換する、時間を守る、などがあがった。



ELET 代表のマービン・オグル氏

問題を意識すること

ここで本題に入る。１２名が３名ずつ４つのグループに分かれ、このプロジェクトに期待することを模造紙に書き出し、代表者が発表をする。

以下は各グループから出された内容。

第一グループ

1. HIV／AIDS に関して生徒からの質問に正しい答えができるよう情報、知識の習得。
2. コミュニティや家庭内、そして学校における感染者への理解と対応の仕方をどのように生徒達に教えていけばよいか。
3. 我々がすでに感染している人々や影響を受けている人々に対し、どのようなサポートができるか。

第二グループ

1. 学校内においてすでに感染していたり、影響を受けていたりする教師や生徒達にどのように対応したらよいか。
2. HIV／AIDS 教育を父兄や生徒達にどのように行なっていったらよいか。
3. 生徒達へのセックスに関する教育（大変難しい）

第三グループ

1. HIV／AIDS に関しての知識を習得する。
2. 我々自身の態度をチェックするきっかけとなる。
3. 生徒達がより効果的に理解を深めるためにはどのようにしたらよいか。

第四グループ

1. あらゆる意味で影響を受けている生徒達へのサポートの仕方
2. すでに感染していたり、影響を受けていたりする生徒達へのケアの仕方。
3. HIV／AIDS に関して低学年にどのように教育したらよいか。

エイズへの間違った認識を正す

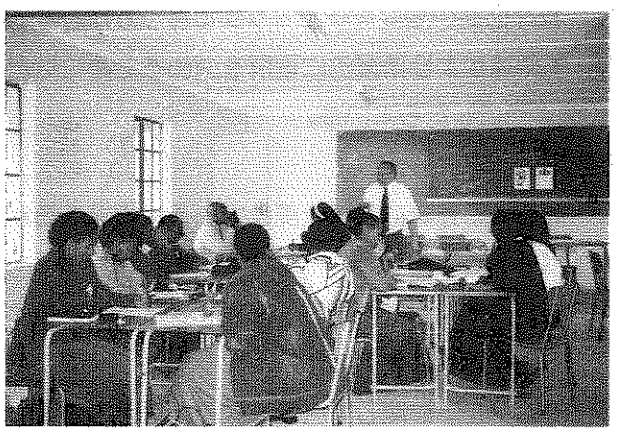
次に HIV／AIDS に関しての基本的な知識についてノントレから話がある。

ＨＩＶとは、HUMAN IMMUNO DEFICIENCY VIRUS ― ウィルスの状態

AIDS とは、ACQUIRED IMUNO DEFICIENCY SYNDROME ― 最終的には死にいたる症候群

次に各グループが、HIV／AIDS に関して、これまでに聞いたこと、見たことを模造紙に書き出し、代表者が

発表する。どのグループもほとんど同じような回答であったが、ここで印象的だったのは、HIV／AIDSに関して不可解な言い伝えが広く信じられているということである。例えばサンゴマと呼ばれる祈祷師の調合する薬でHIV／AIDSが治るという噂。サンゴマの調合する薬は漢方のような自然の成分で、ある種の薬草は感染者の体調を整えるのに効き目があるといわれているが、治るというのは全くのでたらめ。また、バージンとセックスをすると回復するという恐ろしいデマのために、近年多くの少女達、それも数ヶ月の赤ちゃんまでレイプされる事件がおきている。このデマに関しては、メディアでも再三注意を呼びかけているが、人々の口伝えが有効な広報手段である地方の地域に対しては、徹底的に取り締まらなければならない問題である。そしてすべてのグループから、片親、もしくは両親をエイズで亡くし、孤児になっている生徒が増加しているとの発表があった。

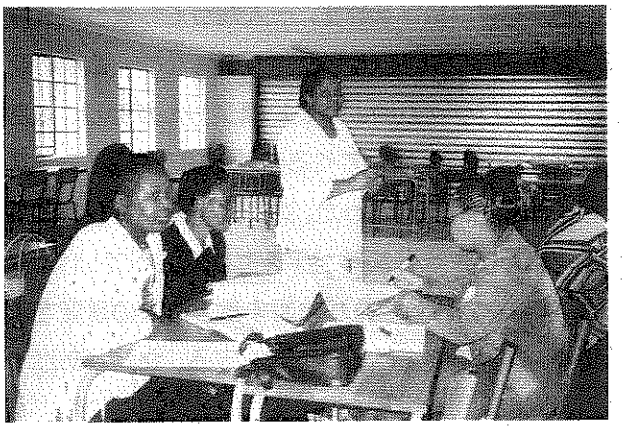


熱心に聞き入る先生たち

質問表

ここで休憩に入り、お茶とパン、お菓子が用意される。休憩後、ノントレから質問表が配られ、３０の質問に対し、正しいか間違いかをチェックしていく。HIV／AIDSに関しての基本的な知識を確かめるものだが、意外と難しく、そうだったの？というような質問もあった。例えば、女性のほうが男性よりも感染しやすいとか、検査で陰性と出ても、HIVに感染している可能性もある、など。この質問表をベースに生徒達へのテストを行なう予定である。次に、ELET オグル氏からプロジェクトの内容についての詳しい説明と、先生方の期待に答えられるような結果をもたらすために先生方に協力して欲しいことなどの話があった。その後、校長先生、先生方、ピア教師の役割について話し合いが行なわれた。プロジェクトの対象学年はグレード７－９（日本の中学１−３年）であるが、グレード５，６も含めたいという意見も上がった。

プロジェクトの目標は、生徒達にライフスキル、つまり主張を持った、忍耐力のある生活態度を習得させることである。セックスに関して教育するのではなく、セクシュアリティの教育である。



ELETの学校巡回指導員ノントレ（中央）と教師たち

インフェクテッドとアフェクテッド

インフェクテッド－感染している／アフェクテッド－その影響を受けている、つまり、家庭内に感染している人がいたり、親をエイズでなくして孤児になっていたりなど。

そういう意味では、私達人間は皆アフェクテッドしているといえる。どのようにこの病気と向き合っていくのか、感染した人々や直接的に影響を受けている人々をどのようにケアしていけばよいのか、若い世代の人々への病気の蔓延を阻止するにはどうしたらよいのか、私達一人一人が考え、行動していかなければならない。

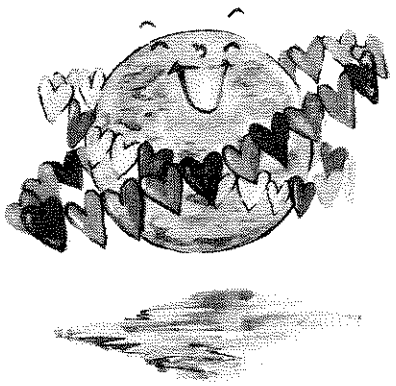
次に、デシジョン・メイキング（選択、決定すること）の重要性を理解するためのゲームを行なう。教室内の

片隅にＹＥＳ、反対側の隅にＮＯ、その間にMAYBE（たぶん）というスペースを作り、ノントレが質問を出す。思ったところに移動し、その理由を明確にしなければならない。まず、運転していて車が故障してしまったが、降りて他の車をヒッチハイクするか、という質問。圧倒的にＮＯが多かったが、その理由は、ヒッチハイク自体絶対したくない、車をその場所に置き去りにしたくない、などがあがった。次に、お金やIDブックの入った財布を拾ったら、連絡先があったが、直接落とし主に連絡するか、という質問。これは半々で、ＹＥＳの人は、直接返してあげるのが一番親切で確実であるという意見が多かった。ＮＯの人が警察に届けるといったら、反対者は“そんなことをしたら絶対落し主に戻らない”という声があがったのには皆大笑いだった。実際笑い事ではないのだが。

最後にワークショップに対する評価の質問表が配られ、記入して閉会となる。

ここで再度お祈り。ズールー語だったので全部は理解できなかったが、神様にワークショップが滞りなく終了したことに対して感謝の気持ちを述べていた。そしてゴスペル。南アフリカでは、小さな集まりから大集会まで、必ずといっていいほど歌に始まり、歌に終わる。皆何曲もの歌を覚えており、しかも自分のパートを持っている。そのため、小さなグループでもあっという間に合唱隊のようになってしまう。

以上でワークショップは終了し、先生方は口々に新学期のプロジェクトが始まるのを期待していると言っていた。この後、ノントレは参加できなかった学校に対し、個別に訪問して改めてプロジェクトに関する情報提供と協力依頼を行なっている。



先生方の意見の中にもあったように、低学年の子供達にこの問題を教えるのはなかなか難しい。先日、南ア版セサミストリート、タカラニセサミを見ていたら、こんな場面があった。ビッグバードが浮かない顔をしていると、ズールーのお母さんが、どうしたの？と尋ねる。バードは歯が痛いときはどうやって治すの？と聞くと、お母さんは歯医者さんに行って治療してもらうのよ、と答える。じゃあお腹が痛くなったらどうするの？と聞くと、お薬を飲んで治すのよ、と答える。じゃあ、HIVにかかったらどうやって治すの？と聞くと、HIV はかかってしまったら治せないの。でもね、きちんと食事と休養をとって、運動もして、規則的な生活をしていれば HIV にかかっていてもハッピーでいられるのよ、というと、バードは喜んで帰っていく。また別の場面では、4, 5 歳くらいの子供たちが幼稚園の庭で遊んでおり、一人の男の子がHIVにかかっているというナレーション。その子がころんで、指から血を流し、保健室に駆け込む。先生は手袋をして血を消毒し、バンドエイドを張ってあげる。男の子は友達のところに戻り、もう大丈夫、また一緒に遊ぼうね、といって輪の中に入るというストーリー。これらは、子供達にHIVに関しての知識を与え、HIVにかかっている友達を仲間はずれにしたり、差別したりしないということを教えている。南アフリカでは、それくらいHIV／AIDSは深刻で身近な問題である。

「人間はいかに生きるべきか」

12 月 1 日のエイズデーには、ネルソン・マンデラ氏の呼びかけのもと、ケープタウンに国内外のトップミュージシャンが集合し、HIV／AIDS の蔓延をおさえ、感染者をサポートしようというメッセージが音楽を通して伝えられた。マンデラ氏は、HIV／AIDSはただ病気の問題ではない、ヒューマニティー（人間性）の問題である、と言っている。南アフリカは人権に関しても世界をリードしており、HIV／AIDSの問題を通して、“人間はいかに生きるべきか”を問うところまできているといえる。

報告会の感想

■平林さんの報告会を聞くたびに思うことは、そこに愛情があるなということです。話の内容もむろん重要ですが、問題に対しての報告者の姿勢がなにより大事だと思います。それから我々は南アの外側をうろうろするのがせいぜいですが、平林さんは南アの内側から語ることができる。生活の関わりを持って語られる言葉の強さを感じます。（そこには難しさもあるのでしょうが）

私が特にうれしく思ったのは、マンデラ氏の言葉を聞いたときです。「HIVは病気の問題ではなくヒューマニティーの問題だ。南アは人権問題を厳しく見ている。この問題を通して人間はいかに生きるべきかを問うているのだ。」マンデラ氏の、差別と戦ってきたこの国の強さを感じることができました。南アに行ったときにもこの種の力強さを感じたことがたびたびありました。

これからの活動が実を結ぶように祈りつつ。

下谷房道

■僕が興味深かったのは質疑応答でのやりとりでした。南ア政権内での個人的な確執がエイズ対策の遅れにつながったこと、メディアで特定の患者が報道されると大量の支援金が寄せられることなどを平林さんがおっしゃってました。エイズをアフリカが自力で克服するという視点から、とても示唆に富む話題ではなかったでしょうか。あとワークショップでの状況をリアルに説明していただけて良かったと思います。警察の汚職のことなど派生した話題にも触れることができました。あと参加者が女性が多かったとかいうのは本当にその場にいなければ分からないことですよね。お話にすごく臨場感がありました。これは僕の意見ですが、もう少し南アのことを全体的に紹介していただいてもよかったかな、と思いました。個人的にそう思いましたがあれぐらいが適当なのかもしれないですが。内容のある、素晴らしい報告でした。

EFFECTED(感染してる)と、AFFECTED(関係してる)という考え方は、ＨＩＶに南アの社会が積極的に立ち向かってる現状を端的に表している感じがしました。

日名徹一

■皆さんの人柄・出身地・得意技など、普段わからないことが知れてとてもよかったです。
平林さん、60代の男性だと思ってましたが、見てびっくり、こんなに若い知的なお姉さまとは！！！
しかも、サーファーとは！！！！！！！！！！！！
もう、水戸黄門の印籠を渡されたような電気が走りました。

南アフリカの学校や移動図書館など、行って見てみたくなりました。私の夢は、50になったら海外に移住してみたいです。あと11年、しっかりと準備を進めたいものです。　いい仲間とお知り合いになれて、しあわせだと思います。

深野正己

■平林さんのお話は、実際にそこに住んでいる方でなければ、知ることのできない内容で、私たちにはとても貴重なお話といつも思っています。そして、もっと「有り難いなぁ」と思えることは、そのお話を通訳の方が介するものではなくて、私たちがいつも使っている言葉と同じ言葉を使う平林さんから伺うことが出来ることだと思います。その音は、自然に耳に入ってきて、そしてその言葉をそれぞれ、みんなが自分の心で感じることが出来ます。

もちろん、それだけではなくて、下谷さんがおっしゃる通り、平林さんの愛情・熱意によるものであることは間違いありません。

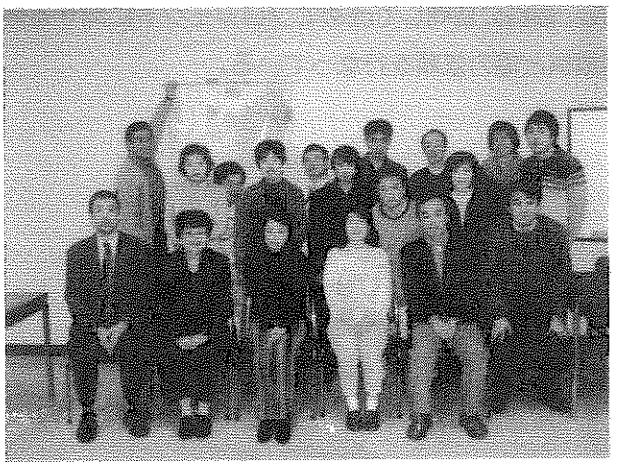
今回のお話の中に、「迷信を信じて、生後数ヶ月の赤ちゃんまでもがレイプされた」というものがありましたね。息が詰まるような悲しいことです。「予防教育」という言葉では、くくれない奥の深い問題だと改めて感じました。

どうしたらいいのか・・・逃げ出したくなるようなむずかしい問題だと思いますが、悲観やあきらめからは、何も生まれてこないので少しずつ芽が出てくることを信じます。現地の皆さんのご努力に頭が下がる思いです。

そして、新年会もとても楽しい時間でした。平林さんの「ジョハネスバーグに住んでいます、平林です。」と言う自己紹介。そのことは、もちろん知っていましたが、平林さんは本当に遠い所に住んでいらっしゃるんだなぁ・・と思いました。

また次回も楽しみにしています。よろしくお願いいたします。荒井さんの写真も期待しています！

西村裕子



報告会終了後、平林さん(左から３番目)を囲んで記念撮影

始まるTAAAとELETとJICAの協力事業
～子ども達による子ども達のためのエイズ予防教育～

TAAA会員・国内調整員　千葉　愁子

南アフリカでは、国民の９人に１人がHIVに感染していると言われます。人口4300万人のうち推定感染者数は500万人。そしてなお、毎日1500人もの人々が新たにこのウィルスに感染しているのです。

「地方の学校を対象に新しい活動を始めたい」TAAAが長年支援を続けてきたELETからそんな協力要請が寄せられたのは、ちょうど１年前です。181万人という南アフリカでも最多のHIV感染者を抱えるクワズールーナタール州で活動するELETは、子ども達への教育活動を通じて、その厳しい現実を目の当たりにしてきました。学校の先生や近所の人など身近な人がエイズを発症して亡くなる、あるいは自分の親がエイズで死亡して孤児になる、自分自身が感染の危機にさらされるなど、子ども達は様々な形でこの病気の影響を受けています。

こういった状況で子ども達をどう守るか―ELETの答えは、子ども達が自分で自分を守ることが出来るよう正しい知識を提供すること、そしてその正しい情報を子ども達が互いに教え合い、一人ひとりが自分の健康と可能性を無駄にしない選択が出来るよう支援をしていくことでした。特に、都会より情報も資源も乏しい田舎では、英語や理科、社会、算数と同じように、HIV/エイズについての教育が学校で行われることが大切です。

ELETからの要請に応えるため、TAAAは、NGOとの連携をうたうJICA国際協力事業団（当時／現・国際協力機構、理事長緒方貞子氏）と打合せを重ね、新たにTAAAとELET、JICAの３つの団体で協力事業を開始しました。期間は2003年11月から2006年３月まで。約２年半にわたり、JICAから資金を得ながら、クワズールーナタール州の15の中学校を対象に、子ども達による子ども達のためのエイズ予防教育活動を行ないます。

ELETが教材を開発し、それを使って子ども達の研修をしながら、研修を受けた子ども達が学校でのクラブ活動や授業の時間を使って他の子ども達にHIV/エイズについて伝える。活動が根づくよう、校長先生や教師に対する研修も行いながら、各学校を巡回して予防教育にあたる子ども達をサポートする。これが１年間の流れで、それを２回繰り返すことで、活動の定着と拡大を目指します。先陣を切って研修を受ける子ども達は、各校から３人ずつの45人。その子達を通じて、最終的に15校7500人の子ども達がHIV/エイズの正しい知識を獲得するという計画です。

私は個人的にこの事業に賛同し、国内調整員としてお手伝いすることを決めました。1996年以来、南アの路上で暮らす子ども達との交流を続けていますが、南アフリカでは「エイズ」という言葉から自由ではいられません。週末はひっきりなしのお葬式で、血液感染を避けるため、怪我をした子ども達の傷の手当てに使い捨てのビニール手袋は欠かせません。また、せっかく路上から家庭に戻れた子がいても、兄弟がエイズで死亡して唯一の家族である姉もHIVに感染、ガールフレンドと生まれたばかりの子供が原因不明の病気で死に、自分も心配だから血液検査を受けたい、一緒に行って欲しいと相談される、そんなことが日常茶飯事です。

しかし、と私は思います。南アフリカの人たちは、あのアパルトヘイト（人種隔離政策）を乗り越えた人々です。一部の人間が自分達の優位を保つために意図的に作り出した貧困のただなかで、人々は多くの犠牲を払いながら闘い、暮らしをつないできました。私は、決してひるまず尊厳を失わない、逞しくしぶとい南アフリカの人々に圧倒されることがしばしばあります。そして、そういう南アフリカの人々の力を決して見誤ってはいけないと思います。アパルトヘイトが撤廃されて10年。子ども達の中には、あの時代を知らない世代も生まれてきています。しかし、あの時代を乗り越えてきた多くの人々の息吹の中で暮らす子ども達に、受け継がれているものが必ずあると信じています。だからこそ、この活動のどこかに関わりたい、そんな気持ちがありました。子どもが子どもに教える、伝えるというのは、南アフリカでは新しい取り組みです。この活動が軌道に乗ることを切に願ってやみません。

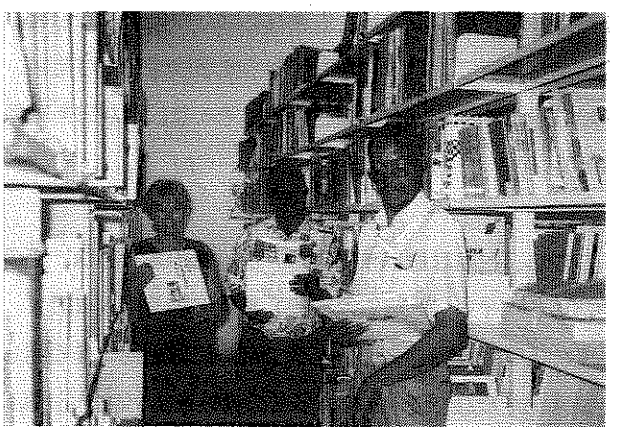
２００３年後期

南ア移動図書館活動報告

平林　薫

１台で３５校を回る

ハウテン州ベノニを拠点としているＮＧＯのＭＥＩの活動は年々規模が拡大され、本年度はベノニ周辺の黒人居住区デベトン及びエトワトワの小学校３５校を巡回した。学校数が増えればそれだけ本のストックも必要となるため、ＴＡＡＡよりコンスタントに寄付される本は、学校の休暇時などを利用して分類、整理され、コンピューターに登録してバスに載せる。現在は常時、１万４000冊が登録されている。また、図書室のない、コンディションの悪い学校に、ある程度まとめて配布したりしている。



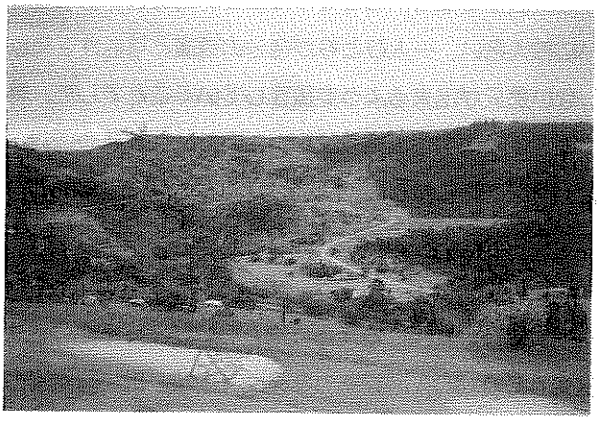
MEIのスタッフ

１４台目のバスが到着

西ケープ州教育省へ寄贈のバスが、一年以上の準備期間を経て１１月２６日、ようやく担当者の手に渡った。西ケープ州では３台めで、このバスはフレデンダールを拠点にウエストコースト地区を巡回する。教育省図書館担当部門のジューン・バーチェス女史とウエストコースト担当のピエール・ブーンザイアー氏は、ケープタウンからズアールを経由し、ズアール移動図書館担当のジャネット・ヘランディエンさんをピックアップして、1750キロ走り港町ダーバンに到着した。事前に通関業者とは話をしてはいたようだが、いざバスを引き取る段階になりあれこれと問題が出てきて、結局丸二日かかりやっと引き取ることができた。ピエール氏はそのままケープタウンへ戻り、ジューンとジャネットは翌日出発した。

広大な未舗装の地帯

ウエストコーストは大変広い地域で、中央を走る国道７号線以外はほとんど未舗装道路である。農業や牧畜が中心で、広大な土地にファームスクールがぽつりぽつりとある。地域の学校数は８７、生徒数は８５００人と多くはないが、隔絶されたようなこの地域は都市部に比べ圧倒的にリソースや情報が乏しい。この地域をカバーするには是非もう一台バスが欲しいというリクエストがあるが、ますます輸入許可が難しくなってきており、今年度は、貿易産業省、運輸省との話し合いを十分に行なわなければならないという課題がある。



国を動かす移動図書館

ジューンは先日プレトリアにおける教育大臣、および国の教育省担当者との会議において、移動図書館車の活動報告をした。全国の田舎の小さな町の学校

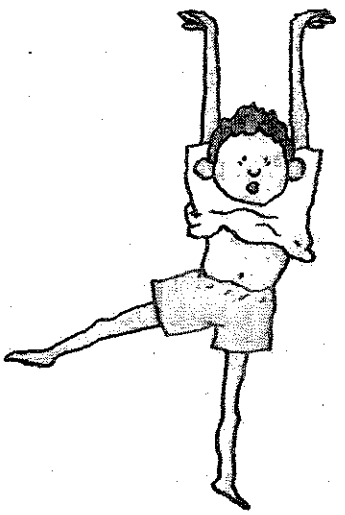
や、周辺のファームスクールなど一校一校に新しく図書室を建設するのには大変な資金と時間がかかる。そこで移動図書館車がその代わりの役目を引き受け、また学校を巡回する際に、常に新しい情報を提供することもできるという提案をしたところ、教育大臣は興味を示し、将来的に国のレベルで移動図書館車を動かしていくプロジェクトにつながっていく可能性も出てきた。そうなると、ＴＡＡＡのアイディアとバスの寄贈が、結果的に南ア教育省を動かすことになる。今期は、再びズアールのプロジェクトと、始まったばかりの西ケープのプロジェクトを訪問したいと考えている。西ケープ州教育省は、寄贈されたバスの名前は日本語で書かれたままにしておきたいと考えている。子供達もバスの字を見てとても興味を示すという。　　[2003年12月]

◆主な活動

（2003年9月15日～2004年1月20日）

※下線は南アでの活動

9/20　清泉インターナショナルスクールへ本引取り　浅見克則　浅見俊介
9/22　打ち合せ会議　浅見　平林薫　野田千香子
9/23　南アJICAプレトリア事務所訪問　千葉愁子
9/25　河合塾よりTAAA訪問受ける　野田宅で　会議
9/27　TICAD3記念シンポジウム　野田
9/30　TICAD3アフリカ大統領夫人会合　平林
10/3　平林連絡員が南アへ戻る
10/4　国際協力フェスティバルAJF手伝い　野田
10/1～10/8　会報３３号編集　山田玲子
10/10　３３号印刷所へ　野田
10/15　JICAプレトリア事務所訪問　平林
10/17　清泉インターナショナルスクールへ本引き取り　浅見
10/19　作業と会議　島田勝　浅見　西村裕子　日名徹一　野田　安部弥生　下谷勇道　千葉
10/19　JICA プロジェクト打ち合せ　千葉　安部　野田　下谷
10/20　西ケープへ送る車、点検移動　浅見
10/21　車を港へ搬入　浅見克則　浅見俊介
10/21　会報発送作業　井出利栄　井出千亜紀
10/24　JICA事業最終会計書類作成　安部
10/27　JICA打合せ会議　千葉　安部　野田
10/29～30　ダーバンELETミーティング　平林
11/7　JICAプレトリア事務所訪問
11/10　JICAと契約交渉　千葉　安部　野田
11/14　JICA事業（エイズ予防ピア学校教育）契約成立（当日から２年半）
11/16　作業と会議　野田　浅見　西村　下谷　島田　日名　深野正己
11/20～21　銀行口座開設手続き　平林
11/27　ダーバンにて西ケープ州移動図書館車受取手続き　平林
11/28　ELETがエイズ学校教育開始。教師ワークショップ　平林参加
12/2　ホームページ更新　大久保忠人
12/2　デベトンMEI活動訪問　平林
12/8　TAAAパンフ改訂　山田
12/11　次回報告会案内とパンフ印刷　野田
12/11～12　ダーバンELETミーティング　平林
12/13　JVC南ア帰国報告会（津山直子氏）へ出席　千葉　野田
12/21　作業と会議　浅見　野田　深野　倉田広　西村　下谷　山田　村泉巨竹
12/22　報告会案内発送　井出利栄　井出千亜紀
12/26　平林連絡員、南アより一時帰国
1/4　シャロームキリスト教会へ　平林　安部　山下八千穂　野田　山田
1/6　アフリカ日本協議会感染症研究会　南アのホスピス報告会へ　野田
1/7　南アのELETへ本を５０７８冊（９１箱）出荷
1/11　南ア帰国報告会（JICA協賛）とTAAA新年会
1/13　JICAへ概算請求書他を提出　安部　野田
1/20　南ア連絡員平林薫、南アへ戻る



１２年間、南アに関わってきた理由

ＴＡＡＡ代表　野田千香子

１９９１年から１９９４年にかけて、南アは世界の注目を浴びていました。私も興奮の気持ちを抑えながら南アの急速な変化をじっと見つめている１人でした。世界でも悪名高いアパルトヘイトが崩壊し、力強い息吹が次々に湧き起こってくるのが遠い日本まで毎日のように伝わってくるのでした。良い方向へ社会がぐいぐいと動いていく・・・その手伝いと応援を少しでもしたい、という気持ちから始まったＴＡＡＡの活動でした。

１２年間、こんなに続けるとは思っていませんでした。多くの方から良く続けてきましたね、と言われますが、続けようという意識よりも、南アの要望に応えているうちに１２年経ってしまった、という方が正しいようです。本がいくらでも必要だ、もっと欲しいと言われ続けているので、「やめる」という概念の生まれる隙がなかったのです。逆に言えば、もっともっと必要だと言われ、その要望が真実のものである事が十分わかっているのに、援助をやめるということの方が不自然に感じられたのです。

日本でごく平凡に暮らす人たちにできることは限られていますが、２３万冊の本と１４台の移動図書館車はなんらかの役に立ってきたかな、と思います。南アの教育大臣がＴＡＡＡの送った移動図書館の活躍に刺激を受けて、国策に取り入れることも考えている、と発言したそうです。（予算が取れればの事でしょうが）

遠い日本からどうして南アか、ということになんら不思議な気持ちは感じた事がありませんが、アフリカ日本協議会の中で、「なぜ近いアジアでなくアフリカか」という論議が昨年交わされた際に発言された龍谷大学経済学部教授の大林稔氏の言葉を引用させていただきます。「アジアに援助を集中すべきだとは、私は思いません。理由は援助は国益や直接の関心に従って配分されるべきではないと思うからです。直接かかわりのある人、近しい人を助けたいという心情は当然ですが、苦しんでいる人に（どこにいる、どんな人であろうと）軽重はないとする立場はこれと矛盾するものではありません。こうした精神の発展が新しい世界を生み出す動力のひとつになりうると思います。自国の関わる国民、自分の民族、自分の家族をまもろうとする考え方は美しいものですが、これを普遍的な人道に対立させると、狭量な心を生む危険があります。わたしがアフリカに関わっているのには、こうした考えも影響しています。」

～読者からのお便り～

○「気の遠くなるような目標をかかげられ、コツコツ歩みを重ねるご活動に敬意を表します。
実際の参加がかなわぬこと、お許し願いつつ、会報拝読しました。」 井関純さん(舞鶴市)

○「今回は『とある日の･･･』の記事を楽しく読みました。」 塩沢恵美子さん(柏市)

○「そのボランティア活動が進学や就職に有利かどうかで価値が決まってしまう浅ましい日本の社会で9月号パッキングの記事は新鮮な感動を与えてくれました。これからも頑張って下さい。」 加藤公満子さん(富士宮市)

寄付金などの振込用紙の通信欄に書いてくださったお便りです。皆さんもぜひ通信欄をご利用ください。

重要なお知らせ

ＴＡＡＡの会員制度及び資金支援について

■ＴＡＡＡが始まってから１０年以上もの間、会員についての明確な規約は存在しませんでした。そのことで特に不都合はなかったのです。しかし、会の活動も広範囲になるにつれ、会員制度がないと対外的にうまくいかないところも出てきました。「ここらでひとつ作ってみよう」ということで話し合ってきた内容をかいつまんでお知らせいたします。

■ひとつのポイントは、会員と賛助会員と二つあることです。賛助会員とは会の活動の趣旨に賛同するけれど、会員のように作業や会議に参加できない人、または団体を想定しています。

■　もうひとつのポイントは、会費を集めるということです。（実は、今まで会費を集めていませんでした。）会費について、以下に記します。

- ● 正会員年会費　　５，０００円　（学生　３，０００円）
- ● 賛助会員　　１口　１０，０００円
- ・ 寄付金は、随時受付いたします。
- ・ 会計年度は、４月１日～３月３１日までといたします。

■　会費の徴収を決めた背景には安定した収入の確保という狙いもあります。今までご寄付をくださった多くの方々に支えられてやってきた私たちの会です。これまで通り任意のご寄付も大歓迎です。さらに賛助会員としてより力強くＴＡＡＡを支援してくださる方または団体は是非ご連絡ください。もちろん会員として参加したい方は大歓迎です。随時、受付中です。

■　このように会員制度を取り入れたわけですが、まだまだ試行錯誤の段階です。よりよい知恵があればご教示いただきたいと思っています。

◎会員登録の申込方法

同封の振込用紙通信欄に以下の内容をご記入の上、会費をお振込みください。

①正会員・賛助会員の別　②氏名　③住所　④電話番号(あればFAX番号)　⑤メールアドレス

尚、会費をお振込み下さる際は、必ず「会費」とご記入くださいますよう重ねてお願い申し上げます。

振込先（郵便振替）　　アジア・アフリカと共に歩む会　００１００－４－６０８５１５